

## 図書館、システム、情報環境

山 田 周 治

図書館は、情報技術の進展に対応してその姿を変えつつある。利用者にとって図書館の変化とは、貸出に機械が使われるようになったこと、蔵書検索が端末で行えるようになったことくらいかもしれない。しかし、利用者の目に触れることのない裏方仕事は、ここ15年で跡形も無くと言ってよいほど変わった。そして今は、新しい情報環境に対応するべく、サービスの内容自体を変えようとしている。

大学図書館にコンピュータが導入され始めたのは20年ほど前になる。当時多くの大学図書館では、蔵書の肥大化と新規資料の増加のため、従来の技術である目録カードによる資料管理に限界が見えていた。これを打開するため、日本語の入力技術さえ未熟な時代であったにもかかわらず、図書館界は積極的にシステム化に取り組んだ。

図書館のシステム化は、単に個々の図書館にコンピュータが導入されただけではない。中央（具体的には学術情報センター）に巨大な目録システムを置き、全国の大学が共同で資料の目録データを入力し管理する(Shared Cataloging)という方式がとられた。これは、図書館の業務とサービスの両面に大きな変革をもたらした。

業務面の影響は目録業務に著しい。それは単に担当がペンをキーボードに持ち替えただけではない。それまで図書館ごとに行なわれていた目録業務が、一つの（電子的な）屋根の下で仕事をするようになった。言い換えると、家内工業から工場制へと移行したのである。それは図書館にとって産業革命と言ってよいほどの変革であった。

こうして入力されたデータを使って、2つの重要なサービスが展開される。1つは蔵書検索のシステム化である。一般にOPACと呼ばれるが、これは図書館を大幅に使いやすくなった。いまではどの図書館でも見慣れたものになっている。

2つめは、ILL（図書館間の相互利用制度）のシステム化である。それまで郵送で行われてきたILLが、学術情報センターにより全国規模でシステム化された。これにより文献入手の時間が短縮されたが、このサービスの質的な向上が需要を大幅に増加させた。その増加量は著しく、各大学とも悲鳴をあげるほどと言っても過言ではない。

このようにして図書館は、システム化により改革を成し遂げた。これはいわば内側からの変革であったが、いま図書館は外からの変化の波に洗われている。それは言うまでもなく、インターネットに代表される情報環境の変化である。図書館もホームページの開設や、OPACをインターネット対応にするなど、それなりの対応を行った。しかし、インターネット技術の影響は、そんな生やさしいものではなかった。だれもが予測しえなかった影響を図書館にもたらしているのである。

第一に、個人がパソコンを持つようになり、それが情報活動の主要な場になったことである。今や情報の入手、分析や加工、レポートの作成など、ほぼすべての段階にわたってパソコンが使われている。パソコンをこのように使いこなす素養は情報リテラシーとも呼ばれ、社会人としての基本的な資質とまで見なされるようになってきている。図書館としても、そのような状況を前提としてサービスの展開を図る必要が出てきたのである。特に情報の入手については、システムを利用できる環境を整え、使い方の指導をするなど、その過程に深く関わるのが求められている。

第二に、情報の受け手の環境がブラウザに統一されたことで、情報流通の革命が起こりつつあるということである。ここで問題にしているのは、CD-ROMなど物理的に形のある資料のことではない。電子ジャーナル、あるいはオンラインジャーナルと呼ばれるもので、出版社が

ら利用者に、電子形態のままインターネットを通じて直接送られる形態のサービスをさす。なかには、文献検索と電子ジャーナルを組み合わせたサービスも始まろうとしているが、これは検索結果の画面から直接オリジナルの文献が読めるので、利用者にとっては、まさに理想的な環境である。今後確実に、情報流通の重要な形態の一つになっていくであろう。しかしこれは、図書館を経由しない情報の流通が本格的に始まろうとしているということでもある。図書館にとってその存在は脅威である。

第三に、情報発信が容易になったことで、大学が生産した情報を自ら発信するよう求められるようになったことである。いわゆる電子図書館と呼ばれる機能の一つである。これは図書館という名で呼ばれるが、実質は出版に近い。図書館は今までにない機能を求められているのである。本来これは、事業ととらえるべきものかもしれない。

それにしても、インターネットである。インターネットは時に様々な面を見せるが、その一つは巨大なデータベースとしての姿である。自由に発信される膨大な情報が、ある程度整理され検索できるようになったとき、それは巨大なデータベースとなって我々の目の前に現れた。量は力を生み、人を引きつける。私自身、貴重な情報を得たことも一度や二度ではない。しかしそれは全く統制のない世界である。内容も質も様々で、泡のように生まれては消えていく。図書館にとっては、まことに扱いづらい対象である。図書館がこれにどう対処するのか、様々な議論と試みが必要とされている。

さてそれでは、これからの図書館サービスはどのようなのであろうか。それは一言でいうなら、情報環境の提供である。情報のメディアと流通が多様化するなか、図書館はそれらを利用できるよう、それぞれに手段を用意しなければならない。一方で、いまだ多くの情報は紙の形で流通している。これまでに蓄積してきた膨大な冊子資料と合わせて、より有効な利用を図らねばならない。さらには学外機関の情報も、資源の一つとして積極的に組み込むことも必要であろう。そしてこれら異質な情報資源を、快

適に統合的に利用できるよう特別に設計されたインターフェースを用意する。完成すれば、それはまさに情報環境と呼ぶにふさわしいものになるであろう。ただ、これを実現するためには、資料やシステムの管理の徹底だけでなく、財源の獲得や配分など経営的な要素も大きく関係する。人員も予算も右下がりの状況のなか、その実現への道は平坦ではない。

今の図書館界のホットな話題は、多言語処理である。システム上の制約から、中国語資料など日本語と欧米系以外の言語の目録データは、言語どおりの形で扱えなかった。最近ようやくシステム環境が整いつつあり、図書館が長い間待望していた多言語処理が始まろうとしている。越えなければならない課題は多いが、図書館はこの技術に熱い期待を寄せている。情報環境を整えるため、図書館は今も自らを変えようと努力している。

最近、ナレッジマネジメントという概念が出てきている。定義すら固まっていない状態であるが、個人のパーソナリティを、組織のためにどのように活用していくか、というのがその目的と聞く。言い換えると、これまで主に業務の合理化・定型化という、個性とは正反対のところで使われてきたシステムが、いま個人のパーソナリティを活用するために使われようとしているのである。図書館職員は、情報と人とを結ぶ役割を担う専門家＝司書でありたいと願ってきた。本来それは個人の資質が大きくものをいう分野である。そう遠くない時期に、我々は自身を情報資源としてシステムに組み込んでいくことになるのだろうか。それは図書館員が追い求めてきたシステムなのかもしれない。

図書館はどこに行こうとしているのか。図書館という建物としての空間、蓄積してきた資料、それを管理し活用するシステム、多様に広がりゆくネットワーク、その上に展開される情報。これに、われわれ司書を含めよう。これら情報資源を統合し環境として提供することが、次に図書館の目指すものである。

(やまだ しゅうじ：附属図書館情報管理課  
システム管理掛長)